

---

# 心の暗闇

終

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

心の暗闇

### 【Zコード】

Z3013T

### 【作者名】

終

### 【あらすじ】

何の変哲もない毎日を送る私が願うのことはただ一つ。

自由になりたい。

誰もが一度は思ったことがあるだろ？。

この何の変哲のない願いが私の人生を変えた。

出会い運命ではなかつた人が私の前に現れる。

私はこれからどうなるんだろう？

窓越しに見える空は青く澄んでいた。

一羽の鳥が空に羽ばたぐ。

鳥は畠畠に空を舞い、そして飛び去つに行つた。

「畠畠になりたい」

教室には先生と生徒の笑い声が響いてい。うるさいほどの笑い声に私の眩まはいとも容易くかき消されてしまう。

「じゃあ教科書の24ページ開いて!...」

黒板の前に立つ社会科の講師、橋本健一は教室をぐるりと見渡した。

「はい、じゃあ...」

先生の気分で指名された生徒が教科書を音読する。

「よし、ありがと!」

教室にはチョークが字を書いていく音しか聞こえなくなつた。

自由になりたい、今度は心の中で眩いた。

休み時間になると教室は騒がしくなる。

「ねえ、愁聞いて！！」

私の前にも一人の少女が立っていた。

「どうしたの？」

クラスで一番仲のよい女子、深山凜華みやまりんかは笑顔で私を見つめた。

「あたしね、好きな子ができたの！」

「また？」

中学生にでもなれば恋の一つや二つ構わないが、凜華に限つていえば多すぎるだらう。

「またとか言わないでよ。今度は本気」

「それ、毎回言つてるから」

「えー？ どうだっけ……？」

首を傾げる凜華に溜息をついた。

「てか、愁は好きな人できないの？」

「うーん… できないね」

「もつたいないなあ。愁、可愛いのに……」

凜華がいつには私はカツコよく綺麗なんだそつだ。  
私には理解できないけど。

「で、その好きな子がどうかした？」

「え？ そうだ……その子愁と同じ中学出身なんだけど知つてゐる？ 各  
前は……」

名前を言おうとした凛華の言葉を遮り、誰かが凛華を苗字で呼んだ。

「あーーちょっと行ってくるねー！」

頬を赤らめているところを見ると今名前を呼んだ人が凛華の好きな人だろう。

凛華が駆け寄った先にいたのは…

## まじめつ（後書き）

今回この作品を読んでいただきありがとうございます。

この作品を書いているのは本物の中学3年生です。

そのため更新も遅くなってしまうと思いますが、精一杯書いていくうと思つてるので今後もよろしくお願ひします。

## 部活

そこにいたのは葉山要。はやまよし。

私の小学校の頃の同級生。

仲はそこそこよかつただろう。  
だが、6年のときに喋った記憶はない。

「アイツね……」

あまり目立つ人ではなかつたが結構モテていた気がする。  
葉山は私には気づいていないようで楽しそうに凛華と話している。

「今度久々に話そうかな……」

キーンコーン

予鈴が鳴つて、生徒が席に着く。

いつの間にか窓は開けられていて、風が頬を撫でた。

「恋なんでしたことないな……」

凛華の幸せそうな笑顔を思い出す。

\*\*\*\*\*

今日の最後の授業とHRが終わり、私は部活着に着替える。

「愁！-行こう～」

廊下から同じ部活の友人が手を振っていた。

「今行く！」

「？」一解「

彼女の名前は橘美咲。

たづねはなみさき

私と同じ陸上部に所属している。

「今日は何する？」

「え？ 美咲決めてなかつたの？」

そして美咲は部長だ。ちなみに私は副部長。

「忘れてた…」

「じゃあ長距離走りついで…」

「あ、いいねえ」

私の学校は陸上の強豪校。

そのため陸上専用のグラウンドがある。

そこには男女50を超える部員が集まっていた。

「はー、じゃあよろしくお願ひしますーー！」

「「「よろしくお願ひしますーー！」」

それぞれに準備体操やストレッチをする。

「まずは30分間走をします。先頭を愁が走るからそれについていくでね。」

「じゃあ、本気でいきます！」

顎のラインで揃えられた髪の毛を1つに結わき走り出す。  
結びきれなかつた前髪が風に流され後ろにいく。

最初はみんな余裕で後ろからは楽しそうな話声が聞こえていたが20分も経つてしまうと苦しそうな息遣いしか聞こえなくなる。

後ろを向いてみると結構距離があつた。

「やっぱ厳しかったかな…？」

今だ軽快に走っている私と正反対のみんな。

「まあ…いつか

30分経つて集合するとみんなへとへとになつていた。

「はい、お疲れ～水分補給してね！」

「愁…なんでそんな元気なの…」

今にも死んでしまいそうな美咲。

「長距離ランナーだから？」

私のあいまいな返答に、部員からはブーイングが来てしまつた。

その後各自に軽い練習を済ませる。

「時間だね」

「うん。はい、じゃあ今日はお疲れ様！！ありがとうございます！」

あんなに青かつた空は真っ赤に染まっている。

「明日も頑張ろ！」

一人咳き、教室に戻るのだった。

## 出舎い

教室の窓はまだ開かれたままで真っ白なカーテンが揺れる。

「窓、開いてる…」

窓を閉めようと手を伸ばすと田の前を鳥が通り過ぎていった。

「…鳥は自由だよね。」

楽しげに空を舞いつ鳥を見つめる。

「帰るわ。」

伸ばしていた手を引き寄せバックを掴む。

窓はまだ開いたままだった。

何かを待っているかのように大きく口を広げて

「ただいま…」

家の中は暗く、返事はない。

カチャヤとカギを閉めてリビングに入る。

「また誰もいないんだ…」

テーブルの上には1000円札とメモが残されていた。

＜今日は帰れない。夕飯代＞

たつたコレだけにメモ。

きっと、父親が書いた物だらう。

仕事しかしない父と呼んでいいのかも分からぬあの男が。

お金を制服のポケットに突っ込み、少し暗くなってしまった細い道を歩きコンビニに向かった。

いつものようにお弁当と飲み物を買、いちょっとした気まぐれでいつも通らない道を歩いてみる。

「明日の夜ご飯どうしようかな…。ん？」

少し先に見える影。

「なんだろ？」

影に近付く。

「つーーーひ、人…？」

それは壁に寄りかかり、ピクリとも動かない。

「だ、大丈夫ですか??」

肩に触れた瞬間生ぬるい液体が手の平を濡らした。

「ひつゝ血？」

雲に隠れていた月が顔を出し、光が差し込む。肩からはドクドクと血が流れていった。

「嘘…し、死んでるの？」  
慌てて携帯を取り出す。

「110で、いいんだよね？」

震える手で数字を打つとガシッとその動きを止められる。

「必、要…ない…」

「え？ だ、大丈夫ですか？？ひ、必要ないって…」

「大丈、夫だ…」

私の腕を掴んでいた手はするりとはずれ、地面に落ちる。

「あの…！…返事してください！大丈夫ですか…？！？」  
(放つておいたら、死んじゃう…)

「それは、ダメ…」

## 出会い（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

できればアドバイスや感想をいただければと思っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3013t/>

---

心の暗闇

2011年10月9日02時45分発行